



連載 [37] 水環境館のゆかいな仲間たち(水環境館の生き物図鑑)

「サツキハゼ」



キョーコちゃん

ミスくん

今一番展示したいものは何か?と聞かれたら、真っ先に頭に思い浮かぶのがこの魚。

観察窓の端に見えるコンクリートの壁にはマガキがたくさん付着している場所がある。大きな魚ばかりに気を取られているとついつい見逃してしまいがちなこんな環境にも実はたくさんの小さな生き物たちが暮らしている。今回紹介するサツキハゼもそんな地味で小さな生き物の一つ。しかし地味だといってもそれは濁った水中にいる彼らを見た印象に過ぎない。実際水から上げてみると顔のまわりのコバルトブルーの模様が何とも煌びやかで美しい魚であることに気づかされる。多くのハゼの仲間と違ってほとんど底でじっとしているということではなく、群れをつかって水中をホバリングしながら流れてくるプランクトンをパクパク食べている。この群れでホバリングする様子は小魚でありながらとても見ごたえがある。館内の水槽でも20匹くらいの群れで展示してお見せしたいと日々考えているのだがこれがなかなか実現できていない。現在汽水魚水槽コーナーでは二年ほど前に偶然採れた老齢の雄個体を1匹だけ展示している。本当はもう1匹雌がいたのだが最近死んでしまい、ひとり寂しく水槽の中を漂っている。すぐ側の川にいたのだから簡単に採集できると思うかもしれないが、この魚危険を察知するとまわりにあるカキ殻の中に素早く逃げ込む習性があるため見えていても簡単には採れない。おまけに口が小さくプランクトンを食べる魚なので釣りでの採集もほぼ不可能。水中に立ち入れる場所なら逃げ込んだ先のカキごと網で掬えば何とか採れそうな気がするが紫川の場合、カキがかなり深い場所についているのでこの作戦が使えない。水上ステージのそばにある垂直のコンクリート護岸にサツキハゼが群れて泳いでいるのが見えるのだが「う〜んどうやったら採れるんだろうか?」といつも悔しい思いをしながら指をくわえて見ているしかない。誰か良い採り方をご存知でしたら教えてください。



スタッフの飼育日誌

“夏休みの出張展示”

今年の夏休みはAIM(アジア太平洋インポートマート)の3階にある「北九州市立子育てふれあい交流プラザ 元気の森」で8月3日から7日まで出張展示を行いました。「里山」、「里川」、「里海」それぞれのテーマに沿った北九州の水辺の生き物たち34種類を展示したのですが、もちろん現在私がドハマりしているヘビ(アオダイショウ)も私のゴリ押しで展示!ここでもまた秘かにヘビファンの拡充に努めていました。

さて開期中の3日(水)と5日(金)は生き物探検の「探検隊長」という大役を任せられてしまい、ちびっこたちを前に「生き物の面白すぎる話」(イベントの告知ポスターにそう書かれていた)をすするというコーナーにも登場しました。「面白すぎる」というとつもまないプレッシャーをかけられながらも展示している生き物のクイズを出したり、カメや魚のエサやり体験をしたり水環境館オリジナルのトビハゼとオヤニラミのペーパークラフト作りをしたりと身近にいる生き物たちの面白さを何とかアピールしてみたのですが、抱腹絶倒の面白さだったかどうかはさておき、みなさん興味を持ってくれたかな?いや興味を持ってくれたと信じます!

これまで野外での生き物の観察会に講師として招待されて行くことは時々あったのですが、今回のように余所の施設に水槽や生き物を持ち込んでの展示というのはほとんど経験がなく、野外で野生の生き物たちを採集して解説するのはまた違った難しさがありました。水槽その他の搬出入だけでへろへろに疲れてしまう我が身の老いっぷりを痛感しながらも色々勉強になりました。また大量のペーパークラフトの準備をして頂いたり、展示の設営で四苦八苦している私のサポートのため夜遅くまで残業していただいた元気の森のスタッフのみなさん、本当にありがとうございました!この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

クラフトの準備をして頂いたり、展示の設営で四苦八苦している私のサポートのため夜遅くまで残業していただいた元気の森のスタッフのみなさん、本当にありがとうございました!この場をお借りして改めてお礼申し上げます。



～ハチガメの海を未来へ～



「曽根干潟でカブトガニウォッチング開催」

8月6日(土)第46回生き物講座「曽根干潟でカブトガニウォッチング」を開催しました。二億年も前からほとんどその姿を変えずに地球で生きてきた「生きている化石」カブトガニ。彼らの日本での最大の繁殖地が実は北九州市の曽根干潟であることをご存知でしたか?今回は例年この時期に干潟に流れ込む川の河口部の砂浜で行なわれるカブトガニの産卵の観察を中心に砂浜に産み落とされた卵や孵化した幼生の探索を行いました。



しかし残念なことに今年の異常な暑さが原因なのか定かではありませんが、6月にはすでに産卵が始まってしまい7月の終わりにはピークが過ぎてしまったのか産卵のため岸辺にやってくるカブトガニのペアもほとんど見つからないような異例の状況が続いていた為、今回は産卵シーンの観察は叶いませんでした。しかし砂浜にはたくさんの受精卵や孵化した卵の殻が見つかり、ハチガメ(カブトガニの呼び名)の命のバトンがしっかりと受け継がれていることが確認できました。

